

# 情報を発信し活用される図書情報センター に向けての方策

井上 次夫\*<sup>1</sup>, 島田 尚子\*<sup>2</sup>

Measures toward Effectively Conveying Information and  
Utilizing Library and Information Network Center

Tsugio INOUE, Takako SHIMADA

To effectively convey information, particularly, those on books and facilitate the use of libraries, it is important to improve the facilities and provide a better environment. Additionally, not only is it essential to understand the user's needs and addressing them, the sender of information needs to actively convey information that is useful to users.

In this study, I examined the measures that are currently followed by the center in conveying information by reviewing its roles and achievements, and then discuss its future.

**KEYWORDS** : Library and Information Network Center, Transmission of Information, Utilization of Information, Improvement Measures

## 1. はじめに

本校図書館棟にある図書情報センター（以下、本センター）は、2001（平成 13）年 8 月より始まった校舎改修の中での図書館棟改修工事が終わった 2004（平成 16）年 4 月、高専の独立行政法人化と軌を一にして、それまでの図書館から名称変更し誕生した<sup>注1)</sup>。その目的は「学生その他の利用者の知識・教養を高めるとともに、教育・研究・調査等に寄与し、もって図書館活動の健全な発展を図ること」とされている。

しかし、いっそうの情報時代を迎えた現在、本センターにおいては次のような新たな課題に取り組む必要が生じている。

第一は、従来の図書という紙媒体ばかりでなく電子媒体の充実に関する検討であり、本センターが発信する情報の内容についての検討である。

第二は、本センターが発信する蔵書にとどまらない広義の「情報」の利用状況を踏まえつつ情報の活用を促す方策についての検討である。

そして、第三には、社会に開かれた学校として本センターが 2000（平成 12）年度から取り組んでいる一般開放のさらなる促進に向けた方策についての検討である<sup>注2)</sup>。

そこで、本稿では以下、本センターが果たしてきた役割と実績を整理しながら、現在、我々が進めようとしている情報発信の方策と方向性について検証し、今後を展望する。

## 2. 本センターの施設概要

本センターがある図書館棟は 2 階建てで、1 階には受付カウンター、第 1 書庫（27 m<sup>2</sup>）、第 2 書庫（21 m<sup>2</sup>）、教材資料作成室のほか、留学生講義

\*1 図書情報センター長 (Director of Library and Information Network Center) E-mail: inoue@oyama-ct.ac.jp

\*2 総務課図書情報係長 (Chief of Library and Information Network Center)

室、視聴覚教室、交流ラウンジ等がある。このうち、交流ラウンジは 2011（平成 23）年に設置され、学生の学習や交流・憩い、行事・イベントの場として活用され始めたところである（5.6）。



図1 交流ラウンジ

2 階には第 1 閲覧室（442 m<sup>2</sup>）、第 2 閲覧室（65 m<sup>2</sup>）のほか、グループ学習室（27 m<sup>2</sup>）、マルチメディアルーム（81 m<sup>2</sup>）、新聞閲覧コーナーがある。このうち、グループ学習室は少人数（3 人～8 人）による円卓を囲んでの話し合い学習が可能である。また、マルチメディアルームにはパソコン 15 台、VTR4 台、DVD5 台を備えている。そして、新聞閲覧コーナーでは主な国内 6 紙（朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、下野新聞、日本経済新聞、日刊工業新聞）を読むことができる。



図2 第 1 閲覧室

第 2 閲覧室



図3 マルチメディアルーム

新聞閲覧コーナー

なお、駐車場には身障者用スペース、入口にはスロープ、エレベーター等を整備している。

### 3. 情報の発信

本センターが発信する情報リソースとしては、大きく蔵書、ホームページ、刊行物類、コーナー展示が挙げられる。

#### 3. 1 蔵書

本センターの蔵書は、2011（平成 23）年度末で表 1 の通りである。

表 1 蔵書一覧

|         |                |         |
|---------|----------------|---------|
| 蔵書冊数    | 75,993 冊（うち洋書） | 4,578 冊 |
| 開架冊数    | 63,379 冊（うち洋書） | 3,313 冊 |
| 雑誌種数    | 538 種（うち外国語）   | 6 種     |
| 新聞種数    | 11 種（うち外国語）    | 2 種     |
| 電子ジャーナル | 8 種（うち外国語）     | 5 種     |
| 視聴覚資料   | CD             | 55 種    |
|         | レーザーディスク       | 15 種    |
|         | ビデオテープ         | 337 種   |
|         | 録音テープ          | 370 種   |
|         | CD-ROM         | 54 種    |
|         | DVD            | 463 種   |

最初に、蔵書冊数について公益社団法人全国学校図書館協議会（以下、全図協）が行った「2011 年度学校図書館調査」の結果をみると、平均蔵書冊数は小学校 8,848 冊、中学校 10,912 冊、高等学校 24,175 冊であり、高等学校（以下、高校）の場合と比べると本センターの蔵書 75,993 冊はその 3 倍を超えている。

なお、蔵書冊数の目安に関してみると、文部科学省は「1993 年学校図書館図書標準」により、全図協は「2000 年学校図書館メディア基準」によりそれぞれ一定の目標冊数を示している。そこで、目標冊数をより多く求めている全図協の基準に従って本校（本科 5 学科 5 学年 25 学級 1,029 人<sup>注3)</sup>）の場合を高校基準に従って求めると<sup>注4)</sup>、蔵書冊数は 52,245 冊となるが、本校をはじめ国立高専の多くは 7 万冊以上の蔵書を有し、それを大きく上回っている<sup>注5)</sup>。

また、全図協では蔵書（図書）の標準配分比率を冊数比で示している。なお、運用については専門教育を主とする学科又はコースを有する高校においてはその専門領域の図書について考慮するとしている。表 2 に小学校から高校までの配分比率と本校の配分比率を冊数で示す。

表2 校種別の蔵書配分比率（冊数）

|     | 0 総記 | 1 哲学 | 2 歴史 | 3 社会科学 | 4 自然科学 | 5 技術・工学 | 6 産業 | 7 芸術 | 8 言語 | 9 文学 | 計                |
|-----|------|------|------|--------|--------|---------|------|------|------|------|------------------|
| 小学校 | 6    | 2    | 18   | 9      | 15     | 6       | 5    | 9    | 4    | 26   | 100 <sup>冊</sup> |
| 中学校 | 6    | 3    | 17   | 10     | 15     | 6       | 5    | 8    | 5    | 25   | 100 <sup>冊</sup> |
| 高校  | 6    | 9    | 15   | 11     | 16     | 6       | 5    | 7    | 6    | 19   | 100 <sup>冊</sup> |
| 本校  | 4    | 3    | 8    | 7      | 23     | 34      | 1    | 4    | 6    | 10   | 100 <sup>冊</sup> |

本校の場合、その専門性の観点から高校と比べてみると、「4 自然科学」「5 技術・工学」の比率が両者で6割近くを占めて非常に高い一方で、その分「1 哲学」「2 歴史」「6 産業」「9 文学」等の比率が低くなっていることが分かる。

次に、雑誌については「化学」「ケミカルエンジニアリング」「新建築」等の永久保存雑誌のほか、「機械の研究」「トランジスタ技術」「理系への数学」等の5年保存雑誌、「オートメカニック」「ラジオ技術」「中央公論」等の2年保存雑誌等の538種と幅広い。また、新聞については朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、下野新聞、日本経済新聞、日刊工業新聞の6紙を新聞閲覧コーナー、英字新聞2紙（Daily Yomiuri、Student Times）のほか、週刊読書人、日本物流新聞、出版ダイジェストを交流ラウンジに備えている。

その他、映画や音楽のDVD等の視聴覚資料を多様に取り揃えているが、その利用状況は振るわず、原因も明らかではない<sup>注6)</sup>。

### 3.2 ホームページ

本センターのホームページへは小山高専HPの「学内施設」からアクセスできる。トップページには「本センターの紹介」「利用案内」「開館予定」「蔵書構成」「蔵書検索」「トピックス」「図書情報センターだより」「小山高専研究紀要目次」等があり、最後にリンク集がある。例えば、図4では夏休みの開館スケジュールをカレンダーで表示しており、利便性が高い。

また、学内サービスページ（学外からは利用できない）には蔵書検索のほか「新着図書案内」「定期購読図書一覧」「電子ジャーナルデータベース」「マルチメディアルーム及びグループ学習室の利用法」「文献複写申込み」「本センター規程」「学生希望図書の申込み」の各項目がある。

なお、本センターのこれらホームページ管理は図書情報係が行っているが、今後、取り組むべき課題もある（3.6）。



図4 本センターHPのトップページ

### 3.3 刊行物類

本センターが定期的に発行している刊行物としては『小山工業高等専門学校研究紀要』がある。これは、1968（昭和43）年度から刊行を始め、2011（平成23）年度で第44号に達している。

近年、研究紀要は英字1,000字以内の英文要旨を付けることとし、サイズをB5版からA4版へ変更、提出原稿を手書きからファイルへ、そしてPDFでの提出へ、発行月を年度末の3月から年末の12月へと変更する等、激しい時代の変化への対応を行ってきている。

図5に、最近15年間（30号～44号）の収録論文数と総ページ数（含研究発表一覧）を示す。収録論文本数は平均26本、総ページ数は平均200ページである。なお、研究紀要36号以降の論文（35号以前は目次のみ）は、本センターHPを通じて閲覧することができる（3.2）。

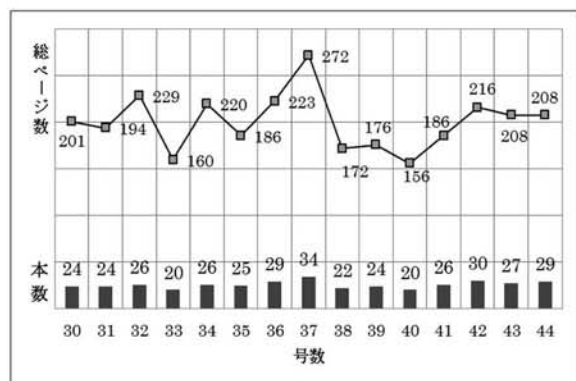


図5 研究紀要の論文数と総ページ数

その他、例年「図書情報センター利用案内」を発行している。用紙は縦長の三つ折り両面印刷（図6右）で、内容は開館時間、閉館日、閲覧、貸出、

返却、利用者カードの説明、本センターの案内図、利用上のマナー、一般利用の案内である。これに本センター「利用カレンダー」を付け4月に新入生全員に配付している。

一方、2011（平成 23）年には本センターに関する Q&A を中心に構成した「小山高専図書情報センターってどんなところ？」（A5 版 3 ページ、図 6 中央）、2012（平成 24）年には本センターの概要を案内する「小山高専図書情報センターによるこそ！」（A5 版 7 ページ、図 6 左）の小パンフレットを作成し配付した。



図6 配付用パンフレット

それから、2011（平成 23）年度には『小山工業高等専門学校図書情報センター概要』（A4 版 24 ページ）を新たに作成した。これは本センター運営委員会の運営委員（センター長、各科委員、総務課長）への配布を目的に作成したものであり、特に本センターの「施設・設備、利用状況、年間活動内容、諸規程・要項・緊急時マニュアル」等をまとめている点が特色である（6.）。

### 3. 4 コーナー展示

本センターが情報発信のために設置している主なコーナーとしては、新着図書コーナー、読書紹介コーナー、企画コーナー等がある。

#### (1)新着図書コーナー

本センターが購入し、手続きを完了して学内 HP の新着図書案内に掲載した図書を順次、新着図書コーナー（本センター1 階）に陳列して紹介している。図 7 左。

#### (2)読書紹介コーナー

一般科国語から例年提供される、低学年の 1・2 年生が国語の授業で作成した読書紹介新聞（B4 版）を読書紹介コーナー（本センター1 階 2 カ所）にパネル展示して紹介している。図 7 右。



図7 新着図書

読書紹介

### (3)企画コーナー

企画コーナー（本センター2 階）では図書情報係が時宜を得た話題で推薦図書を特集し、学生への読書啓発を図っている。例えば、2012（平成 24）年 4 月は「がんばれ新入生、輝け！高専生～一般科目を学ぼう・青春小説を読もう」の特集（図 8 左）、6 月は「2012 年は宇宙が熱い～金環日食をみよう」の特集（図 8 右）を行った。また、7 月には一般科国語による「読書体験発表会～教員からの推薦図書（一言付き）」を特集した（5.5）。



図8 新入生歓迎

金環日食

### 3. 5 一般開放

本センターでは 2000（平成 12）年度より中学生以上を対象とした一般開放を実施している。これにより、地域の社会教育に貢献するとともに、地域住民の科学技術に対する理解を深める機会の提供が可能になった。利用者登録を行うと利用者カードが発行され、図書と雑誌の閲覧及び貸出ができる。2012（平成 24）年 9 月現在、277 人が登録している。

### 3. 6 今後の課題

以上、本センターの情報発信の状況はそれぞれ一定の水準にあると思われるが、次のような検討課題も指摘できる。

①蔵書：本センターの蔵書冊数約 7 万 6 千冊は全国高専平均の約 9 万 7 千冊と比べて少ない。し

かし、書庫の収容能力には限界があるため、今後とも蔵書点検・リサイクル・破棄を効率的に行うことで教育・研究・調査等に寄与する一定の水準を維持する必要がある。

- ②ホームページ：一定の必要な情報リソースを備えているが、いっそう利用者が分かりやすい、使いやすい構成等について検討し、リニューアルを図る必要がある。また、ツイッターを用いた情報発信等の方策の検討を進めたい。
- ③刊行物類：新入生や一般利用者向けにパンフレット類を作成したが、今後、高齢の利用者を念頭に置いた方策について検討したい。また、本センターの概要冊子を充実させたい（6.）。
- ④コーナー展示：知識・教養への意欲を高め向上させる情報・展示、身近な人物からの図書情報等を随時、提供するとともに、それらの定期的な更新にも留意する必要がある。

#### 4. 情報の活用

本章では蔵書のうち、主に図書に関する利用・活用状況について述べる。

##### 4. 1 入館者

図書館棟にある本センターへの入館者数は2010（平成 22）年度で延べ 72,064 人であった。また、貸出総数は延べ 11,281 冊であった。そこで、貸出対象者別の冊数からその比率を求めると、図 9（100%積み上げ横棒）のようになる。

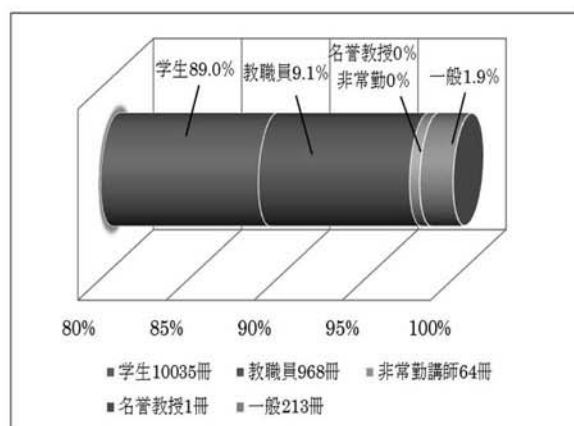


図9 図書貸出の対象者別比率

なお、本校の2010（平成 22）年度の教職員数は121人（教員80人、職員41人）、学生数1,099人（本科の学科生1,027人、専攻科生69人、外

国人留学生13人）で、学生の比率は本校の90.1%を占めている。

次に、全国高専の図書貸出の対象者別平均比率とともに本校の場合を表3に示す。

表3 図書貸出の対象者別平均比率

| 対象者  | 学生    | 教職員   | 学外者  | 計      |
|------|-------|-------|------|--------|
| 全国平均 | 85.6% | 10.4% | 4.0% | 100.0% |
| 本校   | 89.0% | 9.1%  | 1.9% | 100.0% |

全国の高専では学生への貸出が平均85.6%（最大で96.9%、最小で70.7%<sup>注7)</sup>）であるのに対し、本校はそれが全国平均以上である一方、教職員、学外の一般利用者への貸出がやや少ない。この点については教員と職員を区別して集計すること、学外者の年代・性別・居住地等の属性について調査を行い、利用促進のための対策を講じる必要があるのではないかと考えている。

また、学生の修学支援、教員の研究・教育支援、地域連携という機能面からは、今後、本校においてもレファレンス件数<sup>注8)</sup>について、その内容とあり方について検討を行う必要がある。

##### 4. 2 図書貸出

###### (1)分類別

図書貸出について、日本十進分類法（NDC）の0～9類に文庫他を加えた、本校の分類別図書貸出状況（過去3年間分）を図10に示す。

これによれば、「4 自然科学」「5 技術、工学」の図書が群を抜いて多く貸し出されており、「文庫他」「10 文学」がそれに続いている。これに対し「1 哲学」「6 産業」の図書の貸出冊数はきわめて少数にとどまっている。

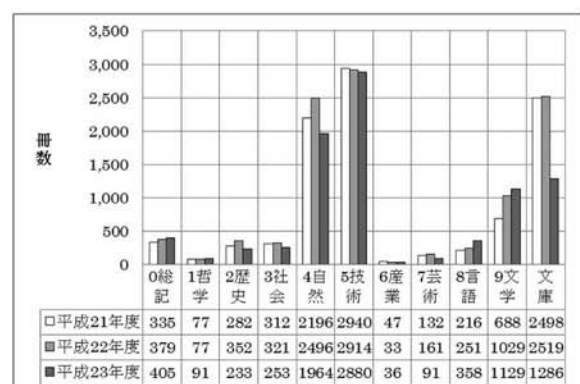


図10 分類別貸出冊数（3年間）

さて、表4に日本十進分類法（NDC）の0～9類について、それぞれ本校の蔵書に対する貸出利用率（％）を求めた結果を示す。これは、本校の2010（平成22）年度における蔵書配分比率（表2の冊数）に対する、同年度の貸出比率（冊数）の割合を求めたものである。

表4 蔵書に対する貸出利用率

|     | 0総記 | 1哲学  | 2歴史 | 3社会科学 | 4自然科学 | 5技術・工学 | 6産業 | 7芸術 | 8言語  | 9文学 |
|-----|-----|------|-----|-------|-------|--------|-----|-----|------|-----|
| 蔵書  | 4   | 3    | 8   | 7     | 23    | 34     | 1   | 4   | 6    | 10  |
| 貸出  | 5   | 1    | 4   | 4     | 29    | 38     | 0   | 2   | 4    | 13  |
| 利用率 | 125 | 33.3 | 50  | 57.1  | 126   | 112    | 0   | 50  | 66.7 | 130 |

表4によれば、「9文学」「4自然科学」「0総記」「5技術・工学」の順に利用率が高く、いずれも100％を超えている。一方、「6産業」「1哲学」の利用率は非常に低い（前述）。このため、利用率が高い分類に属する図書は質と量の両面から蔵書をいっそう充実させ大きな需要に応える一方、利用率が低い分類に属する図書については利用促進の方策を新たに検討する必要がある。

## (2) 学年別

本校の本科5学年と専攻科2学年における過去3年間の学年別の図書貸出冊数を図11に示す。

図11によれば、概ね学年が進行するに従って貸出冊数が増加する傾向を指摘できる。この原因としては、特に高学年の4・5年生になると専門科目での実験・研究レポート作成の課題が多くなり、それに対応して専門図書の貸出冊数が増加するためであると思われる<sup>注9)</sup>。

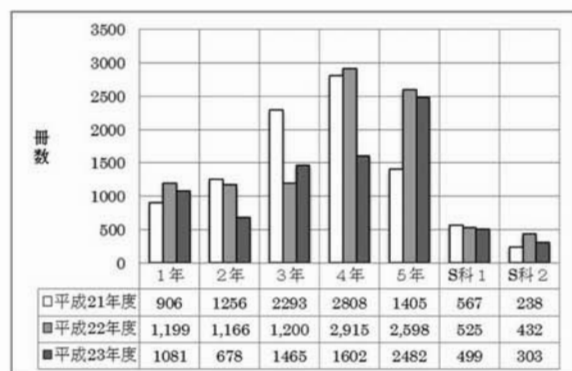


図11 学年別貸出冊数（3年間）

## (3) 学科別

本校の本科5学科及び専攻科の図書貸出冊数を図12に示す。データは2010（平成22）年度。これによれば、貸出冊数の最多は物質工学科の2,570冊、最少は建築学科の1,067冊であった。なお、本科5学科の平均は1,816冊である。

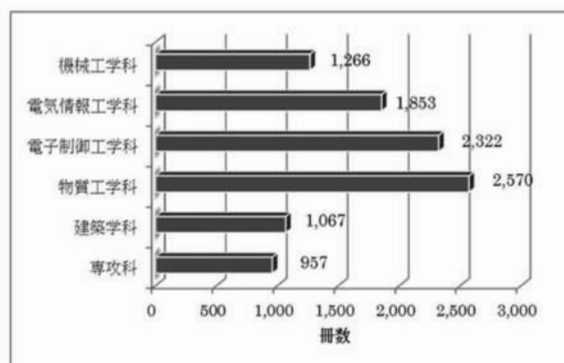


図12 学科別貸出冊数（全学年）

今後、各学科に関する蔵書冊数、図書の種類をはじめ学科間格差の原因について広く検討する必要があると思われる。ちなみに、専門科目よりも一般科目が中心である低学年（1・2年生）の学科別貸出状況をみると、図13のようである。

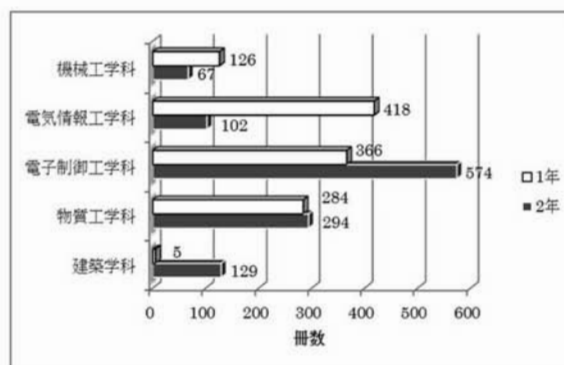


図13 学科別貸出冊数（1・2年生）

## (4) 個人平均貸出

全国協が例年、毎日新聞社と共同で行っている全国の児童生徒の読書状況調査によると、2011（平成23）年5月の1ヶ月間における平均読書冊数は小学生9.9冊、中学生3.7冊、高校生1.8冊であった。前年度に比べると、小学生・中学生・高校生のいずれも減少しているが、依然として高い数値が維持されている（図14）。

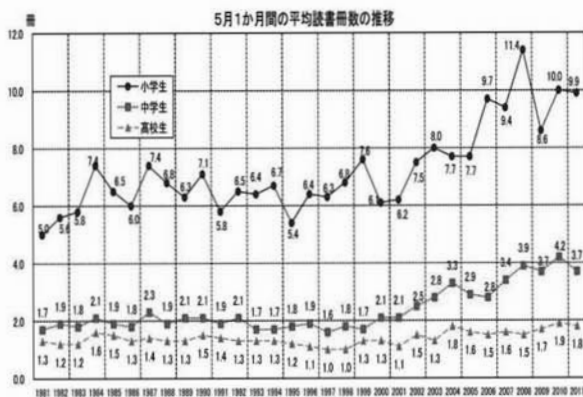


図14 1か月間の平均読書冊数の推移

ただし、本校では同様の調査を行っていないため、ここでは同年5月の1ヶ月間における本センターの平均貸出冊数を求めたところ、1.1冊にとどまった。貸出以外の方法で読書していることもあるため一概には言えないが、今後の読書指導ではこの結果を念頭に置くことが肝要である。

#### 4. 3 その他

本センターの情報リソースには図書を中心とする蔵書のほかに、ホームページ、刊行物類、コーナー展示がある(3.)。ここでは、それらの活用状況について述べる。

まず、ホームページを通じての情報発信は行っているが、その利用・活用状況については不明であり、現在、来館者数や蔵書貸出数等で予測するしかない状態である。このため、本センターHPへのアクセスカウンターの設置、来館者へのアンケート実施等について検討したい。

また、刊行物類、コーナー展示についてもその利用・活用状況は明らかではないため、今後、来館者を対象とするアンケート調査の実施を検討すべきであると考えている。

#### 4. 4 今後の課題

以上、図書貸出を中心に本センターの情報の利用・活用状況をみてきた。

その結果、貸出冊数のように定量化できるものは詳細な分析が可能であり、その利用・活用の実態を明らかにすることができた。しかし、ホームページのような一方的な情報発信についてはその利用・活用状況は把握が困難であり、今後、主に来館者を対象とする利用者アンケート調査を定期的実施することを検討する必要がある。

一方、図書の貸出状況については随時、学級担任や学科教員へ読書指導の一助となるように報告し、また利用主体である学生に対しても積極的に公開することによって読書啓発を図りたい。

### 5. 行事・イベント

国立高等専門学校機構の業務改善委員会は図書館担当係の具体的な業務内容として利用者の登録、図書の貸出・返却をはじめとする38種類の業務を列挙している<sup>注10)</sup>。その中に「イベント(企画展等)の立案・開催」があり、これもまた本センターの重要な情報発信の方策であると同時に、利用者への情報活用場の提供にもなっている。

以下、本センターによる6種類の行事・イベント(新入生ガイダンス、電子ジャーナル講習会、ブックハンティング、リサイクル図書、読書体験発表会、交流ラウンジ)について述べる。

#### 5. 1 新入生ガイダンス

例年4月、視聴覚教室(図書館棟)で新1年生を対象として図書情報センター長がパワーポイントを用いた本センターのガイダンスを行っている。その後、新1年生はセンター内を見学し、利用者カードやパンフレット類を手にも図書情報係の職員から解説を受ける。

#### 5. 2 電子ジャーナル講習会

本センター主催による電子ジャーナル講習会を高学年(4・5年生)・専攻科生・教職員を対象として本校の情報科学教育研究センター(第1演習室)を会場に実施している。

講師は外部講師又は図書情報係が務める<sup>注11)</sup>。内容は、本センターHP(学内ページ)に収録の「論文情報ナビゲータ CiNii」及び「科学技術文献情報データベース JDream II」の紹介、それらの基本的な利用法の講義と実習である。

2012(平成24)年6月に実施した講習会への参加者については表5の通りである。

表5 講習会への参加者

| 内 訳  | 人数 |
|------|----|
| 5年生  | 28 |
| 専攻科生 | 5  |
| 教職員  | 2  |
| 合計   | 35 |



図15 電子ジャーナル講習会

受講者アンケートによれば、①「文献探索の意義（必要性・有効性）」をほぼ全員が理解し、②「JDream II の利用法」についてもほぼ全員が理解している（表6）。回答者31人。

表6 文献探索の意義・JDream II の利用法

|      | よく理解 | ほぼ理解 | 少し理解 | 理解不能 |
|------|------|------|------|------|
| ①意義  | 15人  | 15人  | 1人   | 0人   |
| ②利用法 | 16人  | 13人  | 2人   | 0人   |

また、③「講習会の中で実際に Web にアクセスして行った実習」についてもほぼ全員が有意義であると回答し、④「今後の JDream II の利用」については31人全員が今後、利用したいと回答した（表7）。回答者31人。

表7 実習の意義・今後の JDream II の利用

| ③ 実習の意義 | 大いにある | ふつう   | 小さい   |
|---------|-------|-------|-------|
|         | 13人   | 16人   | 2人    |
| ④ 今後の利用 | ぜひしたい | 利用したい | 余りしない |
|         | 24人   | 7人    | 0人    |

### 5. 3 ブックハンティング

ブックハンティングは年2回（6月・11月）、希望学生（定員12人）が図書情報系の職員と放課後に近くの書店に向き、陳列された多くの本を見てその場で購入する行事である。予算は各回1人1万円とし、学生の視点から選ばれた専門書、一般書、ライトノベル、コミック等80冊前後（約1,300円/冊）を購入し配架している。

参加者の募集は、これまで本センター内の掲示板とHPを通じて行っていたが、今後は各学級への募集ポスターの掲示により学生に広く呼びかけることで周知を図る予定である。



図16 ブックハンティング

### 5. 4 リサイクル図書

リサイクル図書とは、蔵書の中で不用決定がなされ除籍された図書のうち再利用を目的に本センターのリサイクルコーナーや学校祭（工陵祭）で提供する図書のことである。学校祭では、図書館棟入口横の一角にコーナーを設け、学校祭に訪れた人が随意にリサイクル図書を無償で持ち帰ることができるというシステムにしている。

2011（平成23）年度についてみると、図書（含専門書）約800冊、雑誌約300冊を提供し、図書は約4割、雑誌は約6割がリサイクルの用に役立っており、好評を博している。

### 5. 5 読書体験発表会

読書体験発表会は、2001（平成13）年度から続く一般科国語の主催で行われる学校行事であり、本センターと教務委員会が共催している。

本センターは、秋の読書体験発表会に関係する学生への教員推薦図書の購入と陳列・貸出、発表会当日や発表者表彰式での写真撮影等で協力している。教員推薦図書は、例年7月に本センターの企画コーナーで特集し教員の推薦の一言コメントとともに紹介し学生の貸出を促している。



図17 読書体験（企画コーナー）

## 5. 6 交流ラウンジ

交流ラウンジは2011（平成23）年10月、それまで書籍、雑誌、新聞等を自由に読むために設置されていた閲覧室（ブラウジングルーム、図書館棟1階）を新たに学生の学びと憩いの場、加えて教職員や地域住民との交流・交歓の場として利用することを目的として改修し、2012（平成24）年度から本センターが正式に「交流ラウンジ」として運用を始めた空間である。交流ラウンジには閲覧コーナーのほか、多目的コーナー、ポスターコーナーがある。

通常は閲覧コーナーを学生が自習の場として利用している。他のコーナーの利用実績としては2012（平成24）年度の後期までにポスターコーナーにおいて写真展示（写真部）、多目的コーナーにおいて椅子の展示（建築学科）、朗読会とハンドベル演奏（公開講座）等の各種イベントが行われている。



図18 展示・イベント

## 5. 7 今後の課題

以上の行事・イベントは、本センターの業務の一環として担当している。中には恒例化したものも多いが、交流ラウンジの運営のようにまだ緒に就いたばかりのものもある。

今後の課題として、まず電子ジャーナル講習会への参加促進が挙げられる。2012（平成24）年度は図書運営委員（教員）を通じて学生への働き

かけを各科の教員に依頼したが、今後は学級担任を通じて直接的に働きかける、電子ジャーナル講習会のアンケート結果を学生に公開しその効果を直接的に訴える等の方策を実施したい。

次に、ブックハンティングについては常連化した参加者から学年、学科の幅広い参加者へと広げるための方策を講じる予定である。

一方、リサイクル図書や交流ラウンジは、本センターにおける一般開放が狭義の図書貸出（3.5）にとどまらず、広義の地域への文化・教養の場を提供する重要な契機となる可能性を秘めている。このような観点から、その運営に関する効果的な方策の検討を進めることが課題である。

## 6. 規程・要項・マニュアル類

最後に、本センターに関係する規程類がどこまで閲覧できるか、発信状況について検討する

### 6. 1 規程

規程の中でも本センターの最も基本となる「小山工業高等専門学校図書情報センター規程」は、本センターHPの学内ページ及び『学生便覧』で閲覧することができる。なお、『学生便覧』のキャンパスライフ編には「図書情報センターの利用について」として学生向けへの解説が掲載されている。また、一般利用者向けに関係する部分は本センターHPの「利用案内」から利用に関する情報へアクセスできる。

一方、学内の教職員にとっては、校内グループウェア desknet's の「文書管理」内の図書情報センターにある「研究紀要」「文献複写・貸借」「学生用推薦図書」「不用決定候補資料」「電子ジャーナル講習会」等の項目から必要な文書にアクセスできる。

### 6. 2 要項・マニュアル類

上記の規程以外にも関係文書があり、従来の要項等に加え、近年、新たなマニュアル類も作成していることから、図書運営委員等の関係者がそれらを紙媒体で一覧できることを目的として2011（平成23）年度に『小山工業高等専門学校図書情報センター概要（平成23年度版）』を初めて作成した（3.3）この『図書情報センター概要』には、次に示すように規程のほか、要項・マニュアル類についても収載した。

表8 『図書情報センター概要』の規程類

## ○規程

- ・小山工業高等専門学校図書情報センター規程
- ・小山工業高等専門学校図書情報センター運営委員会規程

## ○要項

- ・小山工業高等専門学校図書情報センター一般開放実施要項
- ・小山工業高等専門学校研究紀要投稿要項
- ・小山工業高等専門学校における図書情報センター資料の不用決定及び廃棄に関する処理要項

## ○マニュアル

- ・緊急マニュアル：火災、地震、異常気象、館内の異常時対応

## ○その他

- ・「交流ラウンジ～学びと憩いの空間～」の利用について

今後、『図書情報センター概要』は、収載文書の充実を図りながら改訂を行うとともに<sup>注1 2)</sup>、本センターへの理解が深まることを目的に配付の対象、方法、活用等の検討を進める予定である。

## 7. おわりに

本稿では、蔵書にとどまらない広義の情報という観点から本センターの情報発信と利用・活用の状況を概観した。そして、本センターが研究図書館の機能と学習図書館の機能を併せ持つこと、しかし、大学図書館とは異なり最大の機能は学生の修学支援にあること、さらに地域への一般開放を促進する機能への期待にも対応する必要があること等を明らかにした。

それら機能の促進のために、さまざまな方策を講じつつある現在、従前の業務上の課題に対処しながら改善を図るとともに、新たな業務については積極的かつ慎重に効果を見極めながら推進していく必要があると考えている。

## 参考文献

- 1) 小山工業高等専門学校 (1995) 『小山高専三十年誌』新日本法規出版
- 2) 小山工業高等専門学校 (2005) 『小山高専四十年誌』第一印刷
- 3) 神戸市立工業高等専門学校 (2012) 『総合情報センター広報』第24号

- 4) 国立高等専門学校機構業務改善委員会 (庶務部門・会計部門・学務部門連携) (2012) 「図書業務の在り方について (報告書)」

- 5) 公益社団法人全国学校図書館協議会ホームページ <http://www.j-sla.or.jp/>

- 6) 三浦登志一 (2012) 「読書活動の充実による国語科の授業改善」『日本語学』31-5、明治書院

## 注記

注1) 本センターの沿革をたどると、1965 (昭和40) 年、本校仮校舎に図書室が開設。その後、校舎内の教室を転々とし、1976 (昭和51) 年に竣工の図書館棟2階に移転し図書館が開館した。その後、1982 (昭和57) 年に図書室は正式に図書館へと改称した。なお、図書情報センターの名称は、関東信越地区9高専 (茨城・木更津・群馬・東京・長岡・長野・産業技術・サレジオ・小山) の中で本校のみで、他校では図書館である。

注2) 本校の第2期中期計画3.①「地域社会との連携にかかる各施設の充実」cに「図書情報センターの一般開放を一層促進する」とある。

注3) 2012 (平成24) 年5月1日現在。

注4) 文部科学省では高校における標準を示していない。

注5) 全国の55高専図書館の蔵書冊数は、最少57,174冊から最多181,324冊までの幅があるが、平均は97,703冊である。また、52校は7万冊以上の蔵書 (和書、洋書のほか雑誌、点字、DVD・VTR等を含む) を有する。

注6) 視聴覚資料の2011 (平成23) 年度の年間貸出数は、49件に過ぎない。これは、それらの視聴環境が家庭等で整っていること、学生が多忙であること等によるのではないと思われる。

注7) 参考文献4、p.5。

注8) 全国の55高専図書館における利用者対象別の1ヶ月間のレファレンス件数は、学生68.3%、教職員20.5%、学外者11.2%である。参考文献4、p.16。

注9) 平成23年度の貸出数がやや少ないのは、3月の東日本大震災の影響で本センターの開館日数・時間が例年より減少したことが一因と思われる。なお、貸出者割合は全1,090人中626人の57%であった。

注10) 参考文献4、pp.12-14。

注11) 2010 (平成22) 年度から3年間、科学技術振興機構情報提供部の火口正芳氏に講師を依頼した。

注12) 新たに『図書情報センター概要』への収載が考えられるものとして「図書情報センターだより執筆要項」「ブックハンティング実施要項」等がある。

【受理年月日 2012年9月25日】